

# 図書館報

聖隷クリストファー大学

第1号

2003.3

- ・ 情報化社会と図書
- ・ 本は背表紙から読む
- ・ ある教室の風景から
- ・ 焚書
- ・ 所蔵文献目録
- ・ 利用統計
- ・ 貸出ベスト3
- ・ 編集後記

## 情報化社会と図書

図書館長 畠山 龍郎

私たちの社会には様々な電子情報が駆けめぐっており、爆発的ともいえる情報革命がおこなわれています。この情報革命は私共に「物事」について思考する機会や、それらを判断するいとまを与えてくれず、必要としている「情報」だけを人工的に入手でき、その情報を考えたり判断したりしないで収集した情報をまた発信しております。

情報化社会では自分自身の五感（視・聴・嗅・味・触）で得られた「情報」より検索して得られた情報の方が価値があると考えているようです。

かつて、グーテンベルグの印刷術によって「聖書」が印刷され、われわれが直接「御言葉」に触れるようになった画期的な情報の革命の時代は過去に葬り去られたのであろうか。

私たちが大学で勉強する意義は何なのだろうか。図書館の存在理由は何なのか。幼少の頃よりゲームやパソコン・ソフトによるバーチャル・リアリティを獲得してきた者には現実と仮想現実の区別がつかかねております。現実社会の実践に役立つための人間理解、問題解決能力、他者と交わるコミュニケーション能力等、また神への「信仰」について学習する機会がはたして与えられているのだろうか。

情報化社会において良い図書に直接出会うということは「自分以外の他者」に出会うような体験であり、全身全霊（五感）でどのように受け止めるのか判断がせまられるのです。電子メディアと図書は全然異なる役割と機能をそれぞれもっていますが、図書には単なる役割・機能を超えた無限の影響があります。

私事で恐縮ですが、小学3年生の時小学校の図書室で「ヨセフ物語」という人生で最初に出会った本がありました。創世記37章以下に記されている聖書の話ですが、ヨセフという人物の不思議な人生と神の御導きに私もヨセフの兄弟たちと同様「神がわれわれにされたこのことは何事だろう。」（42章28節）と震えたことを今でも思い出します。神との出会いの衝撃的な体験だったのです。

情報化社会における検索によって得られる情報はあくまで情報という知識でしかありません。図書という活字をとおして思索することとは意味が違います。図書を読むことによって知識のみならず真実なるものに近づくことが可能であり、自分だけの情報を得るだけでなく、他者の考え方、文化、真理の深さがわかってくると思います。

本学の図書館の機能も図書に関連する資料一

CD-ROMやオンライン・データベースなど総合的な学術情報を提供する機能が期待されております。また利用者に対しても情報活用能力を習得できるような援助機能も要求されてきました。

したがって従来よりいっそう受入業務、目録、夜間開館、自動貸出、外国雑誌業務など「大学設置基準の大綱化」、「大学の自己点検評価」の動向と共に2005年の電子図書館化の方向に向かって準備を進めております。

本年度は大学図書館の拡張改修工事や短大図書館の吸収統合等、看護・福祉・リハビリテーション学部の専門大学としての特色ある専門図書館としても充実していく計画です。将来的には総合図書館建設の構想もあります。

教育活動のグローバル化と地域社会への貢献が要請されている昨今において、図書館の現状の業務をそのまま電子化するのではなく、制度や手続きを改めることも必要になってくるのであり、電子化は教員と学生のためだけでなく地域の関係機関にもその方針を明示して利用しやすいものにする必要もあります。また著作権等の問題もあり、倫理と規則を順守するプログラムを導入することも必要になってくると思われます。

何はともあれ、大学で学ぶということは自主的・主体的に「自己学習力」を習得することであり、そのためにも図書館と部室にかよう大学生生活に期待するものであります。

## 本は背表紙から読む

社会福祉学部長 遠藤 久江

教員の研究室にはおびただしい本が並んでいる。学生はよく「先生はこれ全部読んでいるの？」と、問いかけてくるが、私は「とんでもない、全部なんか読んでいないよ。でも、こうして並んでいると、いつの間にか背表紙から読んでいるのよ」と答える。

社会福祉の守備範囲は人間の生活全般にわたるので、広くまた多様な様相を呈している。そこで、ついあれも、これもと本を買い集めてしまう習性が身に付いてしまった。だから本棚にはとりとめもなく様々な本が並んでいる。しかし、不思議なもので、あちこちに雑然と並べてある本を見ていると、この本にはこのようにことが書いてあるに違いないと思いこんでしまう。なぜそのように感じるのか解らないが、ひょっとすると、その本達への愛情が芽生えるのかもしれない。そして、ある時、たった一つのことを調べたいばかりにめくってみたら、見事に応えてくれると言う経験を何度かしている。

だいたい背表紙の字はその本の厚さによって字の大きさが決められるので、個性的であると言えば個性

的であるが、背表紙のデザインにまで気を留めているのかどうか分からない。本を手にするときはやはり表題を読んで、興味にかなえば手にするものである。だから背表紙が研究室の本棚で強烈なオーラを発して並んでいるとも思えない。

本の出来不出来はいろいろあるであろうが、一冊の本を完成するにはそれなりの苦労や努力が必要であろう。たぶんこの人間の業が本棚の中で生き続けるのかもしれない。

ところで、昨年3月に科学研究費の報告書の作成をした。使い慣れない調査分析のソフトを使っての報告書で、とまどいながら作成した。その結果分量がなく、大変薄いものになってしまった。しかし、科学研究費の報告書には背文字を入れなければならない。出来あがったものを見たら、背表紙とは名ばかりで、文字が線のようにしか見えないものであった。これでは背表紙から中身を見ることはたぶん不可能であろうと思ひ、見えないところにしまい込んでしまった。

## ある日の教室風景から ー身辺雑記よりー

看護短期大学部教授 山本よしゑ

12月に入るとV時限目の窓の外は、夜の帳が降り始める。ある日、授業が後半になって急に後ろの席がざわついてきた。「どうしたんですか?」と、ざわついている辺りの学生をさした。教室にどっと笑いが起こる。その原因が何であるのか、私には皆目見当がつかない。私が口をへの字に結んだので一瞬、教室は静寂になった。が、すぐさま、一人の学生が、「先生、蜘蛛です。蜘蛛です」と早口で続け、前の席の上方空間を指さした。

その指先が示す方向には、蛍光灯に反射した銀色の細い糸が、天井から一本垂直に垂れ下がり、その下端には真っ黒の大きな蜘蛛がまるまっていた。蜘蛛が動くたびにその糸は上下に揺れている。側に近寄ってその光景を目の当たりにすると、瞬時にそれは地獄から、一本の蜘蛛の糸を一生懸命よじ登っているカンダタの姿と重なってしまった。

自分だけ助かろうとして、自分の足の下に垂れた糸の下方に繋がっている、罪人達を制したカンダタの大きな一声で、ぷつぷつとその糸が切れてしまった。カンダタは元の地獄へ、真っ逆さまに落ちてしまった。芥川龍之介の『蜘蛛の糸』に描かれたカンダタの話である。

地獄からの脱出もすぐそこに、というところでぷつぷつと糸が切れたこと、それは子供ごころに大きな罰として、深く心に刻印されている。

今、私の目の前にぶら下がっている蜘蛛は、罪人のカンダタとは全く異なり、自力で糸を紡ぎ出し、どこかにその糸を張り付け、あのまるで計算されたような組織だった網目の巣を作ろうとしていたのであろう。間違っってこの広い教室に迷い降りてしまったのかも知れない。この蜘蛛が安住の巣づくりの場を、一刻も早く見つけてくれることを祈り、私は、「蜘蛛が教室の皆さんを激励しにきたんでしょ」と言って教卓に戻り授業を再開した。

普段は殆ど無意識の世界にしまい込まれていると思いがちな、幼少時の読書体験はその実決して忘却のあなたにある訳ではない。こうして似たような場面に遭遇すると、斯くも鮮やかに体験を呼び覚ます。言葉を替えて言えば、読書とは読む者の心や精神を耕し、人格形成の営みを助け、個人の生活そのものを陰に陽に形づくっているものとも言える。

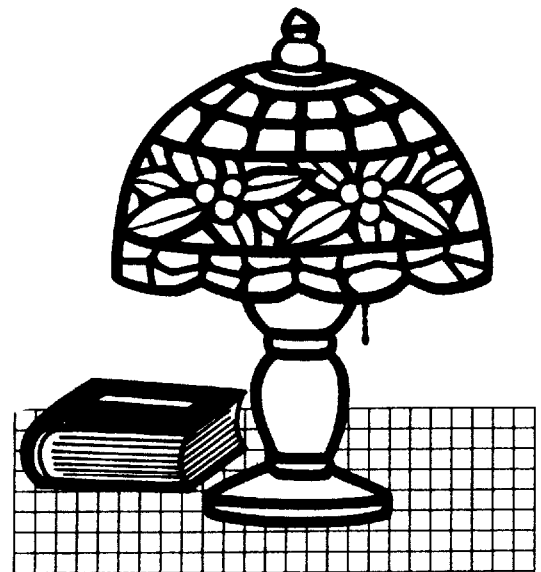
従って、幼児・学童期の成長期こそ、子供たちが読書に親しめる環境を調べ、よい読書習慣を身につけさせるような、働きかけをすることが大切であると思う。

芥川龍之介 著

「蜘蛛の糸」(1918年)

所蔵：筑摩書房「現代日本文学大系43」(1968年)

918/G/43 (大学図書館2F)



## 焚書

看護学部教授 寺田 晃

時は中国の春秋戦国時代、齊、燕、趙、魏などの国々が辺境防衛のため築いてきた万里の長城を、延々2400キロ・メートルに渡って完成させた秦の始皇帝の時代である。天下を統一したとはいえ、始皇を批判する反主流の諸士が絶えなかったため、始皇は、公文書、農業、占い、医薬以外の書籍を焼却するように命令し（B.C.213）、さらに翌年、始皇を非難し、反対した儒者460余人を咸陽で穴埋めにしたという。これを「焚書坑儒」と言う。

「焚書」は、思想の基になる書籍を焼却する行為である。それは、古代から世界各地で見られた。先進国の英国でも、19世紀まであったと伝えられている（the book-burning）。わが国では、これまでのところ然したる焚書はなかったらしい。他方、第二次世界大戦後は、東西を通じて一部の国を除き、大掛かりな図書館の焚書はなかったようである。しかし、大戦前にはあった。1933年5月10日のヒトラー政権下における焚書がそれである。ゲッペルス宣伝相に呼応し、ドイツの30の都市で、熱狂的なナチス信奉の大学教授および学生らにより、1日に約20万冊もの焚書が行われたと言われる（die Bücherverbrennung）。

図書館は、その昔、紀元前、メソポタミア（チグリス河域の）のアッシリア国王、アッシュルバニバル（B.C.669～626）の王立図書館とも言うべき「公文書のコレクション」にその端を発したと聞く。以後はキリスト教と学問の組織とを中心として、古代ギリシアからローマの時代、さらに15世紀までの中世とルネッサンスを経て、近世、現代へ発展してきた。中でもアレクサンドリア図書館は有名である。ただし、図書館は、その歴史の過程で安泰な発展を遂げてきたのではない。アレクサンドリア図書館を含めて、各地・各国で幾多の破壊を経ながら政治的弾圧と統制の憂き目に晒され、あまつさえ上記のような焚書の難にも遭いつつ、今日に至ったのである。

本来、図書は、思想の本質とその伝達に関わる。それ故、図書館と図書の運命は、時の為政者の政治的権力の如何に左右された。特に独裁政権下でその傾向

が著しかった。いわば民心を統制し縛り付けておくのには、為政者の思想や施策に反する書籍を抹殺する焚書が、最も効果的な手段であったわけである。

しかし、ドイツの叙情詩人、評論家としても著名なハイネ（H. Heine：1797～1856）がいみじくも述べたように、“書物が焼かれる所では、ついには人間も焼き払われる”わけで、学問は萎え発展が阻まれることになる。かつてドイツの体系的形而上学者のヘーゲル（G.W.F.Hegel：1770～1831）は、ある事象が他の反対の事実と対立して、それら両者間に矛盾が生じ、「正・反・合」または「定立・反定立・総合」という3段階によって“止揚（das Aufheben）”が展開されるとき、先の事象（正）から次の事象（正）への論理的内容の発達があることを指摘した。著名な“概念の内容とその発展”に関する「普遍的弁証法（die allgemeine Dialektik）」が、それである。

これは、要は一つの思想・論考は、それと相反する対立的立場との間で統合、つまり止揚されてこそ、いっそう上位な次の段階に到達するということである。それ故、発達を期するならば、同じ立場の内容だけではなく、たとえ相互に対立し、矛盾するものであろうとも、その理論・思想を積極的に取り扱っていくべきである。そのことは、ヘーゲルの哲学にもとづくスイスのジュネーヴ学派の心理学者として著名なピアジェ（J. Piaget）により、「発生的認識論（l'épistémologie génétique）」の中で理論的に指摘され、特に「矛盾」を問題として発達の・実験的に証明されているところでもある。

とまれ、既述のように、焚書は、為政者が自分の主義に反する書籍を焼却することであったが、ヘーゲルの指摘に依拠すれば、たとえ反対の立場の内容のものであれ、書籍はその種類を限定せず、普く取り上げて、さまざまな内容の止揚の上に、いっそう高次の思考の内容を統合するのが正しい研究の仕方ということになる。私は、その意味で図書館が諸々の分野でアカデミックな図書・雑誌を、可及的、かつリベラルに取り揃えて下さるよう願う次第である。

## 所蔵文献目録

### 〈家族（在宅）看護・介護〉

#### 【単行書】

(分類番号／「題名」／著者／出版社)

- 598.4 「『家で死ぬ』と言うこと」  
西村文夫, 宮原伸二 編著 碧天舎
- 916 「いのち抱きしめて 在宅介護 13年」  
田沼祥子 文, 田邊順一 写真 日本評論社
- 916 「私の介護家族戦争」  
宇野淑子 著 講談社
- S261 「看護・介護のための在宅ケアの援助技術」  
阿曾洋子 編 廣川書店
- S261 「在宅介護支援センターによる介護予防・生活  
支援事例集」 黒田研二 監修 中央法規出版
- S261 「在宅介護支援の今日と明日 新訂版」  
朝倉美江 著 一橋出版
- S261 「結びあう家庭介護」  
早川裕子 著 教育資料出版会
- S400 「家族援助論」  
柏女霊峰, 山縣文治 編 ミネルヴァ書房
- S490 「障害児福祉・家庭援助のあり方 新訂版」  
田澤あけみ 著 一橋出版
- M375.8 「痴呆性高齢者の在宅介護 新訂版」  
馬場純子 著 一橋出版
- N260 「在宅看護・介護のための難病ガイド」  
星恵子, 下條貞友 編 日本医学出版
- N900 「ビリーフ 家族看護実践の新たなパラダイム」  
ロレイン M.ライト[ほか]著 日本看護協会  
出版会
- N900 「ナースのための地域看護概論 在宅看護への  
のかけはし」  
眞船拓子, 杉本正子 編 廣川書店
- N930 「在宅ケアの実践」  
阿部芳江 編著 久美
- N930 「家族看護学を基盤とした在宅看護論 2」  
渡辺裕子[ほか]執筆 日本看護協会出版会
- N930 「初級者から上級者まで使える在宅ケア講座」  
山田雅子 著 日本看護協会出版会

#### 【雑誌所収特集記事】

(特集記事／『雑誌名』／巻号)

- ・ 家族看護：病児の同胞に対するケア  
『小児看護』25巻4号
- ・ 家族を対象とした支援  
『保健の科学』44巻5号
- ・ 家族看護を实践する ロールプレイで深めるそのア  
プローチ  
『月刊ナーシング』22巻13号
- ・ (連載) 家族システム看護の实践に向けて  
『月刊かんどきろく』12巻1～6号
- ・ 21世紀の看護をリードする「家族看護」  
『看護』54巻7号(臨時増刊号)
- ・ 意識障害者の介護教室：家族に自信と安心を  
『看護学雑誌』66巻10号
- ・ 在宅痴呆高齢者の事故防止と家族介護者の負担軽減  
『看護技術』48巻6号
- ・ 在宅療養者への指導：継続看護と連携  
『ブレインナーシング』18巻5号
- ・ 焦点：訪問看護の現状とグランドデザイン  
『看護研究』35巻1号

2002年に発行された家族看護や介護に関する書籍・雑誌の特集です。ここにあげた書籍・雑誌は大学図書館で所蔵しています。書籍は分類番号順、雑誌は50音順に配架してあります。

# 利用統計

## 1. 2001年度の貸出状況

貸出延べ人数と冊数

利用者別	大学図書館での貸出		短期大学図書館での貸出	
	人数 (人)	冊数 (冊)	人数 (人)	冊数 (冊)
看護学部 1年	334	641	2	4
看護学部 2年	825	1,620	6	10
看護学部 3年	625	1,223	0	0
看護学部 4年	953	2,084	0	0
大学院生	69	156	3	5
大学生合計	2,806	5,724	11	19
短大看護学科 1年	44	83	143	268
短大看護学科 2年	128	289	543	1,148
短大看護学科 3年	355	747	483	1,014
短大専攻科生	18	48	73	156
短大生合計	545	1,167	1,242	2,586
専門学校生	37	75	3	6
学生合計	3,388	6,966	1,256	2,611
教職員	376	937	179	396
合計	3,764	7,903	1,435	3,007

\* 学生一人当たりの貸出冊数: 大学図書館 7冊/年, 短大図書館 2.6冊/年

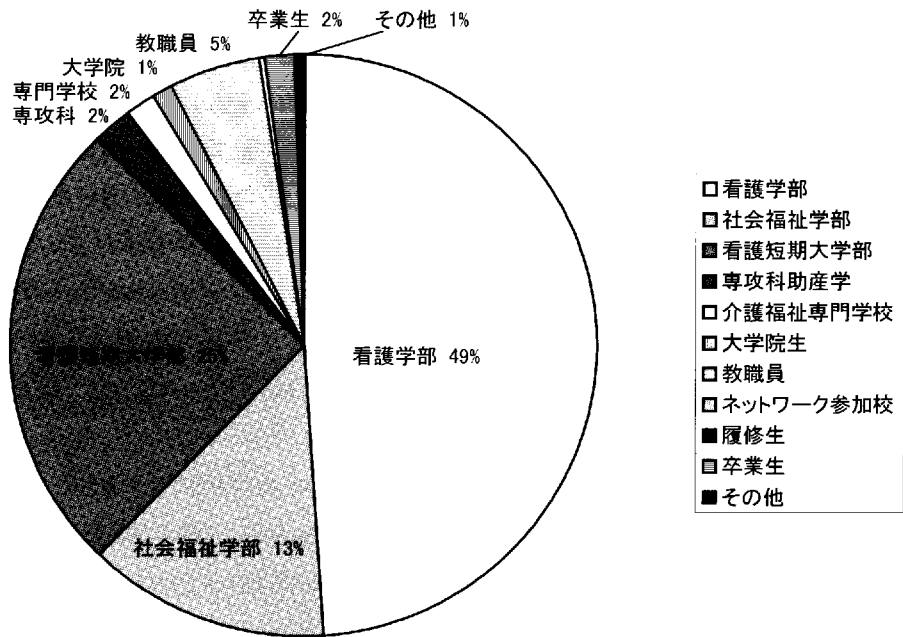
## 2. 大学図書館入館者数 (2002年4月～2003年1月 入退館システムによる統計)

(人)

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	所属別計
看護学部	1,189	2,081	2,157	3,485	536	1,248	2,375	2,314	2,666	2,437	20,488
社会福祉学部	337	552	663	1,186	61	116	689	658	561	737	5,560
看護短期大学部	317	1,059	1,426	1,537	553	1,430	847	645	924	1,830	10,568
専攻科助産学	23	157	187	87	34	11	24	20	153	281	977
介護福祉専門学校	37	54	46	123	41	84	48	59	115	107	714
大学院生	42	73	60	56	25	41	36	35	42	41	451
教職員	235	257	291	228	119	175	241	198	186	162	2,092
ネットワーク参加校	3	3	4	4	0	0	8	0	0	0	22
履修生	0	2	3	6	1	3	0	0	0	0	15
卒業生	38	73	96	80	75	98	89	76	62	78	765
その他	7	20	21	34	20	35	36	10	4	32	219
合計	2,228	4,331	4,954	6,826	1,465	3,241	4,393	4,015	4,713	5,705	41,871

\* 一人当たりの入館回数: 看護学部: 41.9回, 社会福祉学部: 56.7回, 看護短期大学部: 31.2回  
 専攻科助産学: 57.4回, 介護福祉専門学校: 9.0回, 教職員: 12.3回

### 大学図書館入館者の所属別の割合



### 3. 相互協力業務 (2001 年度)

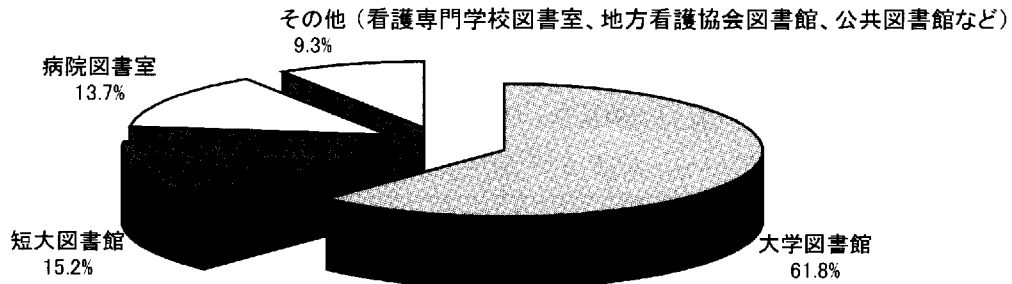
(1) 2001 年度 (2001 年 4 月～2002 年 3 月)

- 1) 学外文献複写依頼 大学図書館:707 件(うち教員:469 件, 借り受け 13 件)  
短大図書館:9 件(うち教員:9 件)
- 2) 学外文献複写受付 大学図書館:298 件  
短大図書館:9 件

(2) 2002 年度 (2002 年 4 月～2003 年 1 月)

- 1) 学外文献複写依頼:602 件(うち教員:254 件, 借り受け 3 件)
- 2) 学外文献複写受付:453 件

依頼元の内訳



## 大学図書館貸出ベスト3 (2002年4月～12月)

- |                    |                                   |
|--------------------|-----------------------------------|
| 1位「小児看護」           | 水原春郎 [ほか] 監修 (1996年・学習研究社) N250   |
| 2位「看護教育」           | 氏家幸子編集企画 (1991年・金原出版) N071        |
| 「整形外科」             | 宮崎和子監修 (1996年・中央法規出版) N163        |
| 3位「バイタルサインの見かた考え方」 | 岩井郁子編集企画 (1983年・金原出版) N110        |
| 「図説臨床老人看護講座1」      | 上田慶二 [ほか] 編 (1988年・メヂカルビュー社) N290 |
| 「図説臨床老人看護講座2」      | 上田慶二 [ほか] 編 (1987年・メヂカルビュー社) N290 |

## 看護短期大学部図書館貸出ベスト3 (2002年4月～12月)

- |                                |                                       |
|--------------------------------|---------------------------------------|
| 1位「小児1(看護観察のキーポイントシリーズ)」       | 宮崎和子監修 (2000年・中央法規出版) N250            |
| 2位「小児看護学」                      | 小林彩子 [ほか] 著 (1998年・医学芸術社) N250        |
| 3位「図説臨床老人看護講座2」                | 上田慶二 [ほか] 編 (1987年・メヂカルビュー社) N290     |
| 「子どもの看護技術」                     | 吉武香代子監修 (1995年・へるす出版) N250            |
| 「腎不全・透析ガイド(ナーシングコミック&テキスト3)」   | 甲田豊著 (1997年・南江堂) N268                 |
| 「エクセルナース5 [消化器編]」              | 北島政樹, 木村チヅ子監修 (1999年・メディカルレビュー社) N264 |
| 「ヘンダーソン・ゴードンの考えに基づく実践看護アセスメント」 | 渡邊トシ子編 (2001年・廣川書店) N130              |
| 「老人看護学(系統看護学講座23)」             | 中島紀恵子 [ほか] 著 (1987年・医学書院) N290        |
| 「ハリー・ポッターと賢者の石」                | J.K.ローリング著 (1999年・静山社) 933.7(大学図書館2F) |
| 「新婚合宿」                         | 藤野美奈子著 (2001年・メディアファクトリー) 367.4       |

### ◆◆◆ 編集後記 ◆◆◆◆◆◆◆◆◆

- ◇ 聖隷クリストファー大学図書館報第1号をお届けします。題字の図書館報は、1984年5月に聖隷学園浜松衛生短期大学図書館報が創刊された折の、当時学長だった故長谷川保氏によるものをそのまま活かしました(直)
- ◇ 日本地図片手に旅行したいです。下調べはもちろん図書館の資料でばっちり!?(宇)
- ◇ いつも資料や施設を利用させていただく皆さんが、もっともっと使いやすい図書館になる為に、図書館も日々変化していきます!(明)
- ◇ 最近、2度目の厄落としに行ってきました。身辺落ち着くといいのですが…。今年に入って、1日だけ“雪”が降りましたね。“桜”は、もうすぐ。春よ、早く来～い(杉)
- ◇ 木いっばいに黄色の花をつけた<sup>おな</sup>乎那の峯のマンサクの花を見に行きました。今見頃です(理)
- ◇ 近年のハリポタブーム、短大図書館でも貸出ベスト3にランクイン。続巻も購入予定です、お楽しみに(仁)

---

図書館報 第1号/発行・聖隷クリストファー大学図書館/2003年3月1日

〒433-8558 静岡県浜松市三方原町 3453/TEL: 053-439-1416/FAX: 053-414-1146

---